西東京市

市民の戦争体験記（二）

目次

発刊にあたって　1
昭和十八年より昭和二十年迄の体験物語（内田稔）　2
豊川海軍工廠空襲においての被爆の記（遠藤綾子）　5
学徒勤労動員の思い出（小島恵美）　7
防空壕の想い出（高林義勝）　10
下町大空襲（土井安代）　11
中島飛行機工場での爆撃体験（古内竹二郎）　14
その日（山川千代）　18
私の少年時代は戦争だった（横山年三）　21

第二集　発刊にあたって

昨年『西東京市　市民の戦争体験記(一)』を発行し、今年は『西東京市　戦争体験記　(二)』を発行しました。ここには、戦争の中でどのようにして生きてきたか、どのようにして親が、兄弟が、友人が、戦争の犠牲になったのか。その体験が記されています。活字の行間から「助けてください。もうこのようなことは二度と起こさないでください」という声が、聞えてくるようです。一人一人の苦しみの体験は、それぞれ違っています。しかしそれはみな戦争が引き起こしたものです。

現在も地球上のどこかで地域紛争が起き、人が殺し殺され、戦争によって撒き散らされた地雷によって手足が吹き飛ばされ、命を落とす人が後を絶ちません。

私たちは、日常の「平和」な生活に慣れると、目の前のことしか見えなくなります。六十四年前は、日本も戦争をしていました。一九四五年以降に生まれた「戦争を知らない世代」と呼ばれる人も六十五歳を迎えます。西東京市の宣言文にあるように「地球上から戦争を無くし」平和な世界を築いてゆくために、その時何が起きていたのか、何故このようなことが起きたのか、何故このようなことを未然に防ぐことが出来なかったのか。戦争を未然に防ぐには何が必要なのか。

これ等のことを考え、学び、そして行動していくことが、戦争を止めさせ、平和を築いてゆく第一歩だと思います。

今後も西東京市の非核・平和宣言事業として「地球上から戦争をなくす」ために、次世代へ戦争体験を語り継ぐ『戦争体験記』を発行していきます。

体験をお持ちの方はご連絡ください。お待ちしております。なお、発行の性質上　西東京市在住、在勤の方、又は旧田無町、旧保谷町での体験をお持ちの方に限らせていただいております。

市民参加ですすめる
西東京市の非核・平和宣言事業

西東京市の非核・平和宣言事業は、市民参加のもとで積極的にすすめています。

今から六十五年前、一九四五年四月十二日、田無駅前に一トン爆弾が落とされ多くの人が犠牲になった日を祈念して、この四月十二日を「平和の日」と条例で定め、毎年多様なイベントを開いています。また夏には、若い人にも広島、長崎の体験を学んでもらおうと、広島や長崎での原爆慰霊祭へ出席し被爆者の体験などの話も聞く機会を設けています。さらに非核・平和コンサート、映画会、学習会など、年間を通して事業をすすめています。非核・平和事業へのご意見、提案など、そしてご協力いただける方の連絡もお待ちしています。

非核・平和をすすめる西東京市市民の会
西東京市

昭和十八年より昭和二十年迄の体験物語

西東京市谷戸町
内田稔
一九二五年（大正十四年）生

昭和一七年十二月、長野県松代商業学校を時節がら繰上卒業。翌年一月大田区蒲田駅近くの新潟鉄工所（社員六千人）に入社しました。会社は軍需工場で、入り口の門には、軍隊の憲兵が二名、警戒していました。工場は二階程の大きな軍艦のヂーゼルエンジンを造っておりました。当時会社に入ると自動的に徴用令により、徴用になりました。産業戦士です。自由に退職出来なく、地方からの社員の中には、ホームシックになり、実家より（チチキトク）の電報を打ってもらって帰ったがバレて、戻された者もおりました。会社の社員食堂のご飯は白米で無く蜀黍（コウリヤン）と大豆粕の混食でした。

戦局に対し、当時軍隊は南方のガダルカナル島、北方はアリューシャン列島のアッツ島にて玉砕。又四月十八日に、山本五十六海軍連合艦隊司令長官がソロモン群島上空で戦死したニュースを聞かされました。逐次兵隊さんが戦死致し、消耗戦に入っている感じでありました。早くも南方の兵隊要員の補充が必要になり、昭和十八年十二月十四日付けにて政府は陸軍特別幹部候補生制度九二三号発令、年齢十五歳以上一九歳迄の男子を志願により適正合格者の採用の募集を始めました。一市民として国を守るか、軍隊に入り東洋平和、家族、国家を守るか考えて願書を出しました。試験は目黒区の東京工業大学で行いました。後日合格通知が届きました。当時軍隊に入る事は生きて帰らない覚悟が必要でした。入隊先は水戸市郊外の水戸陸軍航空通信学校に決まりました。

昭和十九年に入ると蒲田駅近くの商店が家を壊し建物疎開が始まり、政府も東京空襲がある事を予感していた様です。昭和十九年四月一日に兄と従兄弟が校門迄、送ってくれました。時に十八歳の春です。お互い瞼に浮かぶ最後の生き別れの感じでした。

全国からの入校者は二千四百名で十二ヶ中隊、飛行機に乗る通信の適格者は十中隊で（二百八名）編成され、仲間に台湾出身の呉君、朝鮮出身の金山君、大川君、三人とも一七歳です。朝六時から教育と訓練、食事、自習を含め、夜九時迄勤務し、通信機材取り扱いは教官と一対一の特訓です。通信が出来る頃、飛行服を着、落下傘を持ち九九式双発高等練習機に搭乗し、離陸すると、命は飛行機に預けました。高度三〇〇〇メートル、飛行中操縦士より、車輪が故障し脚が出ないと、報告があり、上官と相談、海岸に胴体着陸を決めました。整備士も同乗しており、懸命に点検、修理して無事を得ました。敵に向かい飛行機の中にての通信は強靭な精神力が必要で、教育訓練の中で上半身裸にて剣道の一本勝負致し、捨て身と決断力を体得する事が出来ました。

何日か後の二回目は海上飛行で高度三〇〇〇メートル近くにて、突然機体が落下し頭を天井に打ちました。操縦士からの報告は、エアポケットに入り約五〇〇メートル落ちた話です。海に落ちなくて助かりました。今度は三回目で編隊での通信訓練です。三機編隊で夕方飛びたち、仙台上空にて、折り返しましたが、帰りは暗くなり、他の二機が見当たらなく、操縦士は夜間着陸の経験は無い話です。迷走に近く、学校に通信連絡致し、灯火管制中でしたが飛行場に誘導灯の点灯依頼し無事着陸しました。しかし他の二機は未帰還です。総務係は事故遭難を想定致し留守家族に、遭難連絡手配しましたが、翌日宇都宮飛行場に二機不時着した連絡が入り落着しました。

学校の教育期間の規則は一年半で卒業でしたが戦局が厳しくなり九ヶ月に短縮され、十二月末に卒業し内地、外地を含め、各航空部隊に転属命令が発令されました。

翌年一月同期四名は飛行場のある水戸陸軍航空通信学校本校飛行隊に配属になりました。敷地内には兵舎が二四棟、格納庫四棟ありましたが、大部分は空き状態でした。

飛行隊は通信教育中の見習士官数十名です。二月に入ったら毎日の如く、米グラマン戦闘機が水戸上空に飛来して来ました。飛行隊の通信演習があり飛行服を着て、落下傘を持ち二人で飛行場の端の飛行機に乗るべく飛行場の中程におるときに空襲警報が鳴り既にグラマン戦闘機が群れにて、急降下致し待機中の双発飛行機数機が銃撃を受けました。危なく二人で近くの飛行機の掩体壕（エンタイゴウ）に避難しました。待機中の飛行機には直ぐ退避命令が出て飛び立ちますが、グラマンが後ろから狙い何機か撃墜され又上空では空中戦をして、隼戦闘機一機がグラマン戦闘機二機に囲まれ撃墜され操縦士は亡くなり、地上の我々はなすすべもありません。戦死者の通夜があり衛兵勤務に就きました。更に飛行機の格納庫二棟がロケット弾の被害を受け、火災を起こし、兵舎にも爆弾を投下、歩行者も機銃掃射を受けて何人か負傷しました。又防空壕にもロケット弾が落ち避難していた七人が即死です。側にいた同期の寺崎君は負傷し入院、米軍Ｂ29爆撃機が多数編隊にて毎日の如く水戸市の上空を飛行して通過します。Ｂ29は高度一万メートルで、部隊も高射砲を撃つが八千メートル以上届きません。戦闘機が一機攻撃に飛来しましたが、群がるグラマンに撃墜され、戦死した操縦士の遺体は二日後に発見され血染めの服に落涙を禁じ得ませんでした。地上からは狙われるので、「撃つな」の命令です。

五月頃には移動の関係か人影も少なくなり兵舎も大分空いてきました。三月十日の東京大空襲の時、水戸の朝は晴れていましたが、午後は煙で曇りました。八月一日、夜間水戸市はＢ29延べ百十機で焼夷弾の無差別攻撃を受け、一夜にして灰燼となり消えました。人的被害が無い事を祈り、ただ自然界の一個人に近い心境です。焼夷弾は大きい弾筒に子爆弾を何個か包み投下し、地上約百メートルの所にて、ピカーと光り破裂し、その明るさは花火の感じです。笛の様に風を切り

ヒュー、ヒューと音立てて落ちて来ます。不気味です。同期で外出中の岡村君、須藤君は二日の朝無事に帰隊しました。翌朝焼夷弾の不発弾が兵舎の回りの地面深く何発も模様の様に落ちており、通信の見習士官が拾い調べておる時に爆発致し、顎を骨折しました。この頃、水戸陸軍航空通信学校に女子挺身隊（女子学生）が勤労奉仕に来て若い兵が緊張し、感動していました。

益々空爆が激しくなり、飛行隊は飛行場隣地の松林の中に四〇名入る穴を数棟堀り隊員が屋根を架け、所謂三角兵舎を造りました。全員兵舎に疎開し、雨になると床は水浸しになり、ジャングルの中の様な生活が始まりました。八月頃、米軍の艦隊が大洗海岸沖を遊弋（ユウヨク）しているニュースがあり、東京を目指し米軍が九十九里浜に上陸するのか潜水艦より水戸が艦砲射撃を受けました。夜空が光り発射音がドーンと聞こえ、着弾、如何なるか、考える余裕はありません。八月六日には広島に、八月九日には長崎に原子爆弾が落ち、無線機で上官が傍受し、話してくれました。

八月十三日に航空通信の大演習が長野県で行われる事になり先発隊で上田に向かい、通信機材を上田陸軍飛行学校に据え、駐屯本部を別所温泉の花屋旅館にしました。旅館は疎開児童にて満館になっていました。到着後長野聯隊区司令部で所要を済ませ城山公園を通り、長野駅に向かう途中突然、空襲警報が鳴り、雲の隙間よりグラマン戦闘機が何機も連続に急降下し始め長野駅にロケット弾を落とし、駅は炎上する被害を受けました。夜遅く上田駅迄開通し、駅前で野宿し、八月十五日は上田陸軍飛行学校に無線機が据えてあり玉音放送を聞きました。上田の飛行学校では皆、戦地に向かったのか人は見えません。八月十六日に水戸の学校に戻りました。通信の見習い士官が軍刀抜いて、立木を切り暴れており、飛行隊長が説得し治まりました。飛行隊は先輩が少なく、残務整理を命ぜられ、任務は飛行機、銃剣類他兵器を飛行場の中に並べての点検作業でした。全て鉄屑と化し、今迄の過去と歴史は遠くなった思いです。命令にて鉾田の飛行場も視察し、兵舎はガランとして無人になり、兵舎の中に一歩入った途端に蚤の大群が豪雨の如く、飛び跳ねて襲いかかって来ました。是には閉口しました。

昭和二十年に入り八月の終戦迄に同期の者と上官が特別攻撃隊にて十六名散華されました。残務整理も終わり九月二十日に帰宅すべく水戸駅より貨物列車に乗り長野に向かいました。途中上野駅の上空は米軍の戦闘機編隊が鳥の群れの如く乱舞して威圧をかけていました。上野で乗り換えた列車は長野に向かい、車窓より外を見ると次第に暗くなり、街の灯が見えてきて平和の有り難さを、じわじわ感じてきました。

豊川海軍工廠空襲においての被爆の記

西東京市南町
遠藤　綾子
一九三〇年（昭和五年）生

私が空襲に遭ったのは愛知県豊川市に在った海軍工廠です。海軍工廠について一寸説明しますと

昭和十四年十月十五日　着工
昭和十八年頃　　完成
総面積　九十万坪
建物　　七百棟
機械部、火工部、光学部、指揮兵器部等八つの部

以上のような広大な規模の軍需工場でした。

私達が学徒動員令に基づいて就業したのが昭和十九年秋旧制女学校二年生の時（十四歳）そこに二十年八月迄いたのですが、米軍の爆撃を受けたのが同年の八月七日。その日は数日前から毎日のように偵察飛行らしいのが来ていたので、またかという感じで退避命令の出るのが遅く、全員退避令が出て防空壕に入るやいなや爆弾がバンバン落とされ、恐怖を通り越して、私たちは壕の中でただただ震えていただけという状態だったのですが、後になって知ったところでは、当日の空襲状況は

昭和二十年八月七日
Ｐ51戦闘機に護衛されたＢ29、一二四機来襲
午前十時十三分～十時三十九分迄の二十六分間に
爆弾三二五六発　八一四トン投下
豊川海軍工廠に働いていた人　五万六千人、内学徒六千人
戦死者　　二五四四人　〃　四五二人
負傷者　　一万人（内同級生死者六人）
日本戦闘機の迎撃は無

以上の記録を読んだだけでこの空襲のすさまじさを想像していただけるのではないかと思います。

ところで、この私はというと工場横の防空壕に女子挺身隊の方々、及び同級生数人と爆撃終了まで恐怖におののきながら入っていたのですが、弾が一つ落ちる度に壕の内壁は崩落し、その都度足を抜いていつでも動けるようにと、体験者の挺身隊のお姉さん方の注意でその動作を繰り返していたのが、空襲中止でホッとしたとたん再び落ちてきた弾の故で入口が崩れて埋まってしまい、「いよいよ自分もこれでお終いか」と覚悟したのが再び挺身隊のお姉さんが「皆で叫びましょう。交互に叫んでここに人が居ることを知らせましょう」との励ましで、皆で「助けてー」と何回も何回も叫び、漸くそれを聞きつけた男子工員の方々数人のシャベルにより助け出され

「正門に向って走れ」という指示に従い、二、三人の友人と夢中で走ったのです。

ただ壕を出て驚いたことは、たくさんあった工場が一つも無く、そこここから煙が上がり、地上は死者、負傷者がゴロゴロ。ブスブスとくすぶっている煙りで目も開けられる様な状況ではなく、おまけに自分たちの入っていた壕の両側は一つは直撃で大きな穴になり、一つは潰れてメチャメチャという惨状でした。そこで同じクラスの友人が亡くなりました。

正門への距離ですが、私の所属していた工場から二百メートル位だったと思いますが、通り道は死体ゴロゴロ、地を這う大小の炎、負傷者の苦痛の声、その中を足袋ハダシで逃げたのです。不思議なことに自分自身は火傷程度だったのです。

しかし敵は非情でした。そういう私たちを見逃すまいと、超低空飛行でグラマン戦闘機が少しでも動いている人間に向って機銃掃射をするのです。伏せたり、走ったりを繰り返しながら外へ出たものの、途中で「助けてー」と手を差し出してきた人「水を、水を」と言った人、「一緒に連れてってー」と必死になって見つめていた人、物を言う気力も無く目だけで救いを求めていた人、その声が、目が未だに私の中に残っているのです。その時の私は逃げるのに夢中で助ける余裕も無く、置き去りにした人たちに対する罪悪感と逃げ切った自分を恥じ疎ましく思っています。

確かその二、三日後からだと思いますが、空襲の後片付けが始まり、大きな死体は生き残った男子工員が穴を掘って葬り、私たち女学生は手作業で焼跡の片付けをしましたが、千切れた手足をいっぱい集めた記憶があります。

軍手等、私たち女学生には支給されないので素手です。地下足袋の底かと思って拾ったのが人間の足のその部分だったので思わず悲鳴をあげたのを憶えています。

生き残った友人たちも思いは同じで、皆語るのがイヤで若い頃は避けていたように思います。六十歳を過ぎた頃からポツポツと話せるようになり、今は年一回の同窓会の最後を飾るのは豊川海軍工廠時代の話です。

戦争はいけません。絶対いけません。一発の弾が総ての人々の身体と心をメチャメチャに壊し、全てを無にしてしまうのです。

私の心の中に未だに在る『見捨てた』という言葉の重さは一生背負って行く十字架だと思っています。

学徒勤労動員の思い出

西東京市芝久保町
小島恵美
一九二八年（昭和三年）生

太平洋戦争のさなか、私達は女学生時代を過ごした。当時旧制高等女学校の殆どは五年制だったが、私たちの年代のみ四年生で卒業させられた。戦争もたけなわとなり校内で勉強するどころではない時世となってしまった。四年生になって間もなく学徒勤労動員として軍需工場で働くことになり、私たちの学校は、中島航空金属田無製作所（後に皇国第一七一八工場と変更される）と、朝比奈鉄工所の二手に分かれて出動することになった。それまでも戦時下にあっての学校の授業は当時の軍国乙女の育成に役立つようなものが多く、例えば運動会での分列行進などもその一つで、日頃の訓練のみせどころとなっていた。クラスごとの二列横隊の前に立つ指揮者の号令「分列に前へ―進め」。でマーチに合わせて行進し「かしら―右」で一斉に壇上の校長先生に敬礼。「なおれ」。で再び直進・その迫力に拍手がおこったものだった。私の声がとおるとのことで、号令はいつも私の役だった。そんなこともあってか中島への入所式の際の宣誓は代表で私に、との命を担任から受けた。

昭和十九年六月二日の当日、気の小さい私は宣誓を読み上げる際、緊張のあまり足はガクガク震え、声もふるえ、手のひらは汗でびっしょり。和紙に毛筆で書き上げた字の墨は汗でにじみ、べとべとになってしまった文書を所長さんに手渡した時の恥ずかしさは忘れられない。

その後私たち四名は軸承工場の中の一隅、溶接場に配属され、昼夜二交代に分かれて工員さんたちと共に作業をすることになった。女子学徒では始めての経験だと聞かされた。カーキ色の作業服に黒めがねをかけ、酸素ボンベを背に火花を散らしながらの作業はたやすいものではなかった。ズボンは火の粉で小さな穴だらけとなった。夜勤の時に夜食としてまわってくる雑炊の入ったバケツの音が聞こえると、お腹を空かしている私たちの胸はときめき、注がれる雑炊にのどをならしたものだった。

待ってた待ってた雑炊が　きたよ　きたきた
今夜こそ　うわずみでなく　したずみを

と詠んだ友だちの歌に笑いながら同意していた。日を重ねるうちに「おしゃか」を出すことも少なくなり、他の工員さんたちと肩を並べられるようになった。その頃私の咽は白くただれて痛み高熱がでた。診療所（現田無病院）で診察の結果、ジフテリアと診断されすぐに武蔵工場の病院に送られ、隔離入院した。のちにその病院も爆撃されたと聞かされた。

退院後しばらくして再び軸承工場の現場事務所に戻り事務をとった。次に勤労課に勤め最後に仲良しの友だちと二人監

督官室に配属され事務の仕事をした。この友人は東京女子医専（今の東京女子医大）に合格し、私より一足先に退所した。

この頃はすでに空襲も激しくなり、中島の方向に向かって来る敵機の襲来は連日の如くになった。「大本営発表・大本営発表」。とラジオの声と同時にウ〜と一つ大きく鳴り響く警戒警報のサイレンの音。間もなくウ〜ウ〜ウ〜と小刻みの空襲警報のサイレン。と、彼方の上空から敵機B29の編隊が不気味な唸りを上げてやってくる。急いで防空壕へととび込む。バーンバーンと敵機めがけて打ち上げる高射砲弾は中々届かない。日本の戦闘機が時折体当たりしても火を噴いて落下してくるのみ。あてられたB29はゆらゆらと揺れたまま飛行し続けて行ってしまう。それをみるのは胸が痛み悲しかった。

のちには艦載機も飛んできて、遠距離待避で林の中を駆け逃げる者たちをめがけ低空飛行でパラパラと銃撃を加えつつ頭上を過ぎ去っていく。頭を抱えて草むらにひれ伏すと上から木の枝葉が落ちてくる。生きた心地はしなかった。

その頃だったか田無駅に一トン爆弾が落ちたとの情報に帰りの電車のことを案じつつ帰途につき田無駅近くにたどり着いたとき、一体駅はどこへやら……その時の周囲の状況を思い出すことはできない。とにかく湖のような大穴があいていたように思う。ただ呆然とたたずんでいたような記憶がある。当然電車は通るはずがない。鷺宮の自宅まで歩いて帰った。

その日だけでなく徒歩で通った日も何回かあった。朝早く工場に出かける私を見送るため、母は毎朝通りの曲がり角で私の姿が見えなくなるまで見送ってくれた。或いはこれが最後かも……という思いが互いに働いていたように思う。

そんなある日、監督官の一人○○中尉はため息まじりに「日本はもう負けるぞ」とつぶやくのを聞いた。必勝の信念に燃える軍国乙女はその監督官を睨みつけた。戦争も終わりに近づいた頃、私は進学先の学徒動員の地、長野県の中込に旅立つことになった。監督官から頂いた感謝状を手に中島航空金属でのさまざまな体験を思い返していた。

第二の動員先の中込では始めて顔を合わせる新入生たちとの寮生活が始まった。そこでの作業は広い空地に生えている背丈ほどもある雑草の除去と開墾が主な仕事だった。日頃ひもじさにあえいでいた者たちにとってかなり厳しい労働だった。栄養失調のせいか作業中によく貧血をおこしふらついたものだった。夜は大きな蚤としらみに悩まされたが、そんな日々もその地で迎えた終戦と共に終った。

終戦の日何か不審な雰囲気を感じたので、皆が寮の室の中で待機しているところへ、天皇陛下の終戦の詔勅のあったことを代表者が告げ知らせに来た。しばらくの沈黙に堪えきれず皆嗚咽となり遂に互いに肩を抱き合って泣きじゃくった。

終戦。この地での学徒勤労動員生活とも別れを告げ、再び

荷造りをして東京に戻った。
痩せ衰えた姿で我が家に辿りついた私を、母は涙で迎えてくれた。敗戦と共に国を支えていたはずの心棒は倒れ、全ては崩れ落ちた。国も、社会も、生活も、健康までも。その惨めなどん底から、日本は這い上がり、見事に立ち上がって、今日を築くことが出来たのだが・・・
戦争は恐ろしい。世界の平和を願ってやまない。

防空壕の想い出

西東京市芝久保町
高林義勝
一九四二年（昭和十七年）生

昭和二十年、終戦近く、私は千葉県船橋市に住んでました。母親、姉六歳、私四歳、妹二歳の四人家族でした。父親は私が生まれて直ぐに徴兵され、母親一人で頑張ってました。

その頃、夜になると、”空襲警報のサイレン”が鳴ります。東京を空襲する爆撃機がくるからです。夜、寝ていると、母親が「起きなさい」と3人の子供に大声で言った。防空壕に避難する為です。

母は灯りが洩れないように、電灯に黒布を被せました。そして、子供を連れて防空壕に避難するのが、日常的に成ってました。防空壕に入る前、母親が東京の方を見て「空が赤く燃えているね」と言ってました。

防空壕は近所の人が庭に掘ってくれたものです。畳三枚、大人がやっと立てる深さで、ムシロを被せただけです。土の壁に姉が描いた絵が貼ってありました。

ある日、”空襲警報のサイレン”が鳴り、何時もどうり母親は電灯に黒布を被せました。しかし、何故か防空壕に避難しませんでした。そして母が言いました。

「爆弾が落ちたら、如何しようも無いから、このまま寝ていようね」・・・と。今、想えば、母は心身ともに疲れ切っていたのかもしれません。

四歳でしたが、今でも強烈に思い出します。

下町大空襲

西東京市谷戸町
土井安代
一九二三年（大正十二年）生

（※）
あの大空襲を私は荒川区南千住でうけました。以前に住んでいた三河島の家は屋敷疎開で壊され、田舎に疎開した知人の家を借りていました。

その頃はもう寝巻に着がえて寝る習慣も無くなり、毎晩の空襲に備えてモンペの姿のままモソモソと布団にもぐりこむ日々でした。はじめのうちは警報の鳴る度に防空壕に避難をしたものの、一晩に何度となく鳴る不気味な警報のサイレンにも慣れ、ラジオの流す空襲情報を聞いて、このあたりは大丈夫と思えばフトンのぬくもりに身をまかせながら、真暗な中でラジオの声に耳を傾けていました。その頃は炭のたくわえもなく、一度起きながらなかなか体が暖まらず、暖房は焼け跡から拾ってくるオキ位でしたから。

その日もそうでした。外の様子を見に出た父に「今夜はいつもと違う、早く防空壕に入らなくては」とせかされて、外に出ました。遠くの空が真赤になっていました。近所の人と共同で掘った壕は平地に穴を掘り、横穴式に半畳程の広さのものでした。近所の人と身を寄せ合って入りました。国防服にゲートル姿の父は、隣組の責任者として竹の先にほぐした縄をとりつけた防火はたきを持って見回りに行きました。はじめは遠くに見えた火がだんだん近くに迫ってくるようですが、みんな身を固くして壕におりました。

大きなＢ29が何機も飛んでくるのが夜目にもはっきり見えます。黒い巨大なはげたかのようなＢ29にむけた高射砲の玉なのでしょう。何本も何本も火の線が夜空に向けて発射されます。Ｂ29はゆうゆうと、飛んでいます。パラパラ、パラパラと細長いかたまりを落とします。焼夷弾でしょう。火はだんだん近くなり、近くの被服廠も燃え出しました。レンガの高い塀に囲まれたその建物は、入口にはいつも銃を持った兵隊が立っているのが見えました。

火は燃え盛って望楼を包みます。「早く逃げなければ、早く逃げればよいのに」と、みんなで気をもみました。火はもう塔の上まで届きそうです。「アッ」と思う間もなく、黒いシルエットのような塔の上の兵隊が真さかさまに落ちました。銃を持ったまま、それは影絵のようでした。　その夜は一晩中、防空壕で過ごしました。何度も何度もＢ29は来ました。その度にパラパラと焼夷弾を落としました。どうか私のところには落ちませんように、助かりますように、Ｂ29の姿が見えるたびに祈りました。東の空が白み、やっと夜があけました。長い長い夜でした。

「今日も死なないですんだ」

見渡す限りの焼け野原とは、このことでした。残ったのは、

この一画だけ。歩けば二十分はかかる南千住の駅の高いプラットホームがはるかに見えます。そこまでずぅっと焼け野原です。焼け出された人たちが知人をたよって歩いて来ました。顔も手足も真黒けになって、やっとたどり着いた人たちは口々に昨夜の空襲のすさまじさをかたりました。「地獄のようだ」……と言いました。二時間あまりで十万人が死にました。

二日位たって用事で駅まで行きました。地面はまだあの夜のぬくもりが残っているようでした。誰が片づけたのか、焼け跡は焼けぽっくいが積み重ねられ、焼けトタンが乗せてあり、どこが通りだかわかりません。駅のホームを目あてに、ここだろうと見当をつけた道を歩きました。五分も行かないうちに行き止まりです。目の前はトタンが何枚も積み重ねられ、その下から炭のようになったものがのぞいています。「ハッ」と思ってよく見ると、それは人形の腕でした。積み上げたトタンの下には、焼け死んで炭のようになった人間の死体が重ねられていたのです。道路だと思ったのは、片付けの人の通った跡だったのです。周りの山は、死人の山だったのです。

急いで元の所まで引き返して大通りを見つけ、駅に着きました。国電は動いていました。死人の山の間を歩いても、それほど怖さは感じません。戦争なんだから仕方がない――。勝たなければ――と、鬼畜米英に憎悪を燃やしていました。

戦いが終って、街に明かりがつきました。灯火管制で真暗だった町に一せいに灯りがついたのです。

ネオンもなく、星だけが輝くあの頃の家々の明かりは暖かで、なつかしく、「あの灯りの下で、家族が肩を寄せ合って生きているのだ――」と思うと涙が出てきました。うすい雑炊をすすり、配給された小麦粉をトウモロコシ粉に混ぜて焼いて食べ、いつも空腹だったけれど、夜には、ぐっすり眠れる素晴らしさ。「平和になったのだ。これからは死んだ人の分まで生きなければ――」としみじみ心に誓いました。

戦後何年かたって、その時私は常磐線に乗っていました。電車が亀有を出て、日立製作所の巨大な煙突から炎が夜空に立ち昇るのを、ぼんやり窓からながめていました。満員電車のとなりに立っている女の人が話しかけてきました。「私はあれを見るたびに気が狂いそうになるんです」。この人はあの空襲の日、背中に赤ん坊を背負い幼い娘の手を引いて火の中を逃げたそうです。気がついた時娘の手が離れ、いなくなっていたそうです。背中の赤ん坊もいつの間にか死んでいたということです。

煙突のあの「ほのお」を見ると、手から離れてしまった娘や、赤ん坊を思い出してたまらなくなるというのです。あの日の見知らぬ母親の悲しみは夫を戦場に送った妻や、手塩にかけて育てた息子をむざむざと戦死させてしまった母親の深い悲しみと共に、生きている限り消えることはないでしょう。

戦争はむごい。負けても、勝っても…。
二度と戦争はやってはいけない……、そのためには、私のできることは何でもしようと思います。

（※）一九四五年三月十日の東京大空襲

中島飛行機工場での爆撃体験

西東京市富士町
古内竹二郎
一九二七年（昭和二年）生

一九四一年（昭和十六年）十二月八日、学校へ行くと駅前の商店の子が「日本とアメリカが戦争を始めたぞ」と言う。そのとき私は国民学校高等科二年（いまの中学二年）だった。農家の私の家にはラジオなど無かった。商店の子はいち早くラジオで開戦のニュースを聞いて来たのだった。そのあと担任の先生から「アメリカやイギリスと戦うことになった。小国民としてしっかり頑張らなければならない」とのお話があった。真珠湾への奇襲攻撃・マレー沖開戦の勝利、マニラやシンガポール・ラングーンの占領など、日本軍の電撃的な進撃、勝利に次ぐ勝利のニュースに、私は血わき肉おどる思いがした。こうした情勢の中で、私の中島飛行機多摩製作所への就職が決まり、翌年の四月二日に入社した。

多摩工場は海軍用のエンジンを作る目的で、前年の十一月に完成したばかりであった。私は多摩の第一期養成工であり一年間は一般教養や機械工学と工作実習を学び、翌年の四月、エンジンのピストンとクランクを結ぶピストピンを生産する機械職場に配属された。柳沢二丁目にあった独身寮（現、都営住宅）から通勤していた。その頃の千川上水には水車があり、エボナイトの原料を粉砕していた。早大のプールは無料だったので、友達と泳ぎにいったものである。

当時、飛行機の生産は戦争する上で国の至上命令であり、昼・夜二交替や三交替の二十四時間フル操業であった。最盛時には正規社員・徴用工・学徒動員あわせて五万の労働者で、月産約二千台くらいのエンジンを生産していた。軍需工場だったので、憲兵や軍の監督官も工場を常時まわって監視していた。こうした生産活動をしていた中島を、アメリカ軍はB29による東京空襲の第一目標としたのである。

一九四四年（昭和十九年）十一月一日の昼すぎに空襲警報がでたすぐあと、工場の一万メートル上空をB29一機が銀翼を光らせ、白く長い飛行機雲を引きながら東から西の方へ飛んで行くのが見えた。工場の周りには多くの高射砲陣地があり、B29にむけて撃つのだが、七～八千メートルくらいで爆発し、敵機まで届かなかったのが腹立たしかった。この日は偵察だけだったので何事もなかった。後で知ったことだが、このとき工場の全景を航空写真ではっきりと撮っていたのである。

十一月二十四日、昼食のため食堂に行く途中、突然ドカンドカンと今まで経験したことのない大きな音がした。「空襲だ。すぐ防空壕に入れ」という声がしたので、急いで近くの壕に入った。ズシン、ズシンと地響きがするたびに、壕の土が崩れるので生きた心地もしなかった。静かになったので外へ出

てみると、今まで自分たちが働いていた工場が燃え、表玄関の時計台が無惨にも壊れていた。焼夷爆弾の硫黄や工場の油の燃える臭いがするなか、地下道の入り口付近に避難して直撃を受け、負傷や死亡した人たちが運ばれていった。（記録によるとこの日、B29八十八機が中島を集中的に爆撃し、二百五十キロ爆弾三十八発、油脂焼夷弾十四発が工場内に落下し、死者七十八名、重軽傷者八十余名を出した）。

これがB29による東京空襲の始まりであった。会社はこのときまで工場外への避難を禁止していたが、犠牲者の多いのに驚いてこの禁止令を解除した。それ以来、空襲警報がなると南は三鷹・武蔵境、北は保谷駅近くまで避難する人の波が続いた。

爆撃による破壊や、退避による労働時間のロスで、生産量は大幅に減った。このため会社は生産設備の分散・疎開をはじめた。私も十二月の末に西東京市保谷町六丁目にあった山口自転車（現在は住宅地になっている）に機械とともに移った。しかし、中島といくらも離れていなかったので、はずれ弾が落ち危険度は同じくらいだった。あるとき避難していた防空壕のすぐ近くに一トン爆弾が落ちて、半分生き埋めになり夢中ではい出したことがある。出て見ると土の塊が雨のように降り、紙などが空中で舞っていた。後で一軒の家が直撃を受けて跡形もなくなり、家族の方が五人亡くなったことを知った。

また、時限爆弾を落とされた夜の恐ろしかったことも忘れられない。照明弾が落下傘でゆっくりと落ちてきて、工場や住宅が真昼のように照らされ、警報が解除された後でドカンドカンと時限爆弾が爆発し、こわくて仕事が手につかなかった。その他に航空母艦から飛び立ったグラマンやP51などの攻撃も恐ろしかった。あるとき機銃掃射を受け農家の納屋に逃げ込んで難を逃れたことがある。傷ひとつ負わずにすんだことが不思議なくらいである。

東洋一の近代設備を誇った中島の工場も、敗戦まで十数回の空襲をうけ、爆弾約五百発以上が命中し完全に廃墟となった。保谷市内も流れ弾が落ちて多くの被害を受けた。

いま思うと戦争とは、多大な人命の死傷者と大量の物質の破壊であった。平和な時代に暮らし、戦争のない世界を作っていきたいと思っている。

保谷市と中島飛行機

それから六十年あまり後、ゼロ戦（旧日本軍戦闘機）などのエンジンを作っていた「中島飛行機武蔵製作所」という工場の跡地はいま、武蔵野市役所やNTT研究開発センター、都立武蔵野中央公園、武蔵野北高校、公団住宅、国鉄アパートなどがある一帯になりました。中島飛行機武蔵製作所の経過について、以下簡単に記します。

一九三七年（昭和十二）三月、麦や大根を作っていた畑に、陸軍専用のエンジンを作る「武蔵野製作所」の建設が始まり

ました。一九三八年五月に完成すると、東京工場（現・日産荻窪工場）から転勤した人たちと募集された人たちで、操業を始めました。一九三九年（昭和十四年）今度はその隣に、海軍用のエンジンを作る「多摩製作所」が建設され、一九四一年十一月から生産を始めました。一九四三年の十月軍需省などの要請で、両工場が一緒になり「武蔵製作所」となりました。

この工場は中島飛行機のみならず、日本全体でも重要な飛行機のエンジン生産工場でした。東西が約一一〇〇メートル、南北が約五〇〇メートルで五十六万平方メートル以上あり、建物は二十四万平方メートル位ありました。特に、「多摩製作所」は、ドイツのクルップ工場をモデルにしたといわれ、三階建て四階建てが六棟あり、そのほかに歯車や工具工場もあって、それぞれの工場が地下道で結ばれていました。

材料や外注部品は、武蔵境駅からの引込線で搬入され、地下室で熱処理や砂吹き作業がなされていました。一階ではクランクシャフトやシリンダーなどの重い部品、三階では軽合金を含む小物部品、二階でピストン関係の部品を作り、それらの部品をエレベーターなどで二階の組立工場に集中し、エンジンを完成させていました。完成品は試運転したのち引込線で搬出するという、一貫した流れ作業方式を採用していました。今では当たり前のことですが、当時としては斬新で画期的な生産方式でした。

構外にあった病院にも地下道を通って行けました。地下道の総延長は七キロメートルもあったと言われています。保谷市内には、従業員の社宅や女子寮を含む独身寮などがありました。また大きな食堂や娯楽施設もありました。いまの東伏見四～五丁目あたりは、保谷銀座といわれるくらい商店が並び、にぎわっていました。

武蔵製作所には、最高時、約五万人の労働者が昼・夜二交替や三交替で働き、月産約二千台のエンジンを製造していました。そこには正規従業員のほか、徴用された人や学徒動員された十六歳前後の男女も働いていました。民間会社でも軍需工場だったので、監督官や憲兵隊も工場内を常時まわって監視していました。一九四五年四月、政府は中島飛行機を軍需工廠官製公布にもとづいて、工場を借り上げ武蔵製作所は、第一軍需工廠・第十一製造廠となりました。

こうした生産活動を続けてきた武蔵製作所を、アメリカ軍は東京空襲の第一目標としました。一九四四年（昭和十九年）十一月二十四日の初空襲以来、十数回に及ぶＢ29や艦載機による爆弾攻撃を受けました。投下された爆弾の総量は約三千トンといわれています。そのため生産不能となり機械などは各地に疎開しました。そして武蔵製作所は廃墟と化してしまいました。

目標を外れた爆弾は、保谷、武蔵野、田無、練馬などに落下しました。特に保谷市内の柳沢、東伏見、富士町、本町周辺の被害が大きかったのです。

戦後、工場跡地はグリーンパーク野球場やアメリカ軍の高級将校宿舎やアメリカンスクールなどになりました。それが取り壊されて現在の姿になっているのです。

その日

西東京市柳沢
山川千代
一九二五年（大正十四年）生

昭和二十年三月十日の大空襲の十万人の死者
（筆舌ではつくしがたい）

昭和二十年三月十日戦争も激しくなり、この頃は連日連夜昼となく夜となく警戒警報、空襲警報のサイレンが鳴り、毎夜のようにサーチライトが空をにぎわし、米軍のB29爆撃機の攻撃に国民皆が心も体も脅かされておりました。国内では、衣食共に、皆配給で満足な食料は無く、その上いつ来るかわからぬ空襲で、生きた心地がありません。そこへ親友のお父上が二月二十五日の空襲で、消防団の仕事中、（当時、若者は軍人として出征をしていたため、残りの人達で消防団を作っていた）、焼夷弾の直撃に遭い、即死と伺って私は友達の勤め先に伺うことにしました。

朝、防空ズキン、水と少々のいり米、豆少々など、家にあった食品をリュックに入れ、今日は空襲がありませんようにと祈りつつ、早稲田より州崎行市電に乗りました。永代橋を渡り、お不動様の門前町を車中より見ながら、やはり静かに守られているのだな、今日はまだ警報も無く良かったなと思いつつ、木場を過ぎ、東陽町、砂町で下車し、汽車会社のある運河を渡り、友のいる会社で再会をしました。

友は「私の父は家具職人で、『お前達三人娘には、最高のタンスを造ってあるからいつでもお嫁に行けるよ』と言って、楽しみにしていました。『元気な若者を戦争で「お国のために」と町の皆々様に一針づつお願いし千人針を作って送り出すが、「勝つまでは戦う」という言葉のようになるのか』といった父は、家族を残して亡くなり、余りにもあっけなくかわいそうで、その上満足な葬儀も出来ず」と泣いておりました。私も慰めようも無く、共に手を取り合って泣きました。何時来るかわからぬ警報を気にしつつ、「病気も出来ないし、死ねないわね」と語りながら友と砂町で別れ、私は早稲田方面、友は亀戸方面と再会を約束しました。

州崎より市電で門前仲町、永代橋を渡り日本橋、大手町、神保町までは警報もなく良かったと、電車の中の方々も思っていらしたと思います。九段下を飯田橋の方に曲がろうとしたその時、警戒警報が鳴り、ほとんど同時に空襲警報、あっという間に周りの家々の電気が消え、町は真暗になりました。すぐに飛行機の爆音、今まで来た暗い道の後方が「これは普通ではない」空が明るく真赤に見え、ドンドンというような不気味な音、空には水色の様な銀色のようなサーチライトが何本も電車の中から見えました。その中、何十機もの飛行機の姿が見えてきました。

命を考え、切羽詰りながらもこちらの空にも来るのか、今

は死にたくない、生きる、早く終点の早稲田と願って、その後は無我夢中で暗い道を走り帰りました。空襲がなかなか解除されなく暗闇で、食事といってもオジヤを食べ、今では考えられぬ配給配給で勝つまではガマンガマンと言っていた思いがあります。

百機以上Ｂ29でやられていると、ラジオ放送で下町が大変大変、深川方面がやられていると聞き、眠ることも出来ず大変大変みんな逃げて、死なないでと祈りました。明日は、会社、とにかくどうなったのか、ただ町がない、大変な情報だけ、再会を約束した友を気にしておりました。二日目、早稲田から東陽町まで歩こうと休みをもらい、私が行ってもどうなるものでもないけれど、半月前お父上を亡くした友を思うと、いてもたってもいられず、家にある食品と水をリュックに入れ、防空ズキンをかぶり、「すっかり下町が（全滅した）」というニュースに押され、とにかく早稲田、九段下、神保町、大手町、日本橋と歩き、砂町を目指して、「今日は空襲がありませんように」と祈っておりました。時々お会いする人達の様子、町の様子は、変わりないようにと思いました。

必死で日本橋近くなり大きな荷物を背負いまた風呂敷包を抱え、なんともいえぬ姿の方々とお会いするようになり、茅場町あたりから、気がつくと髪の毛が灰をかぶり、目から黒い泪を流し、「ひどいひどい」と泣きながらどこにいらっしゃるのか、なんとも声をかけることも出来ませんでした。

永代橋に近づくにつれ、「大変だ　大変だ」「困った　困った」と大きな声で叫びながら来る女の人は、頭に灰をかぶり、目から黒い泪を流し、「地獄だ　地獄だ　ひどい」と言う何人もの人にお会いしました。私も永代橋を渡り始め、二日前に見た景色との余りに違いすぎる深川の町がまるきり廃墟で、足が震え歩く気力が無くなり立ち尽くしました。その後、何人かにお会いしましたが、皆涙の跡があり、モンペをはき、何かを持ち「地獄　地獄」と言いながら歩く姿に、私もかける言葉が見つかりません。二人でいらした一人の方が和ボウキの短いのを大切そうに持ち、若い方が困ったように私に「この戦いはいつまで続くのかしら」と言いながら「母は三味線と思っているのです」とおっしゃりながら涙を流し、日本橋の方に歩いていかれました。

二日前の深川との違いすぎる瓦礫の山に、まだまだくすぶっている所、生き別れた方が、自分の居場所を焼け焦げた木の切れ端に、落ち着く場所を書き、放心状態の方々がまだまだ沢山いらっしゃいました。門前仲町交差点を渡りきった所で、アスファルトが熱さでゆるみ、ハダシで逃げたであろう足跡が七、八ほど、小さいの、大きいの、そのそばに真っ黒く焼けた死体を目の前にして、「戦争はだめだ、かわいそう、どうしたらいいか」二日前に見た門前仲町とは全く違い、泣きながらにどうすることも出来ず見てみないふり、一礼をし「ごめんなさい」一言で通り過ぎました。

それから東陽町、砂町へと見てみないふりをし、先へ急いだ。木場の運河にさしかかると、橋の周りの様子が変わり、運河の中を見て、驚きました。普通の人がお身内か、運河に浮かぶ、何人かの死体、頭の毛が燃え、熱さのため運河に飛び込み助かりたかったでしょうに、そこにその死体を引き上げ、この場で焼いています。引っ掛ける棒で、引き上げる何体かを見たことは、これはこれは誰にも語ることが出来ず、地獄のような、足が震え、足が動かず、逃げたくてもただただ立ちすくみ、運河の両側の炎から、皆助かりたくて、飛び込んだ木場の木の上を火がなめた。それで地獄絵の如くと、泣きながら引き上げ、木の上に人を置き、焼くような話を聞きました。やっと自分にかえり、このことは誰にも言いますまい、助けようが、手だすけが出来なかったのか、生きたくて又夢もあったと思うと、かわいそうでくやしくて、思い出すとつらいつらい思い出です。

私はこれは一生話さずと思っておりましたが、戦争はだめ、自分の命を大切にと思いつつ、友の家は全部焼けましたが全員無事を知り、安心したけれど心が寂しく、この日は帰り道をただただ、自分の気を持ち直すだけで、ただただ来た道を朦朧としながら歩き、夜遅く帰りました。

私の少年時代は戦争だった

西東京市田無町
横山年三
一九二八年（昭和三年）生

一、空への憧れ

私が八才の時、日中戦争が始まり、十六才で終戦となった。世は正に軍国主義時代、男子たるもの国の為に死ぬことは本望といわれていた頃です。中学生になって工場動員で徹夜勤務をするようになり、何時、空襲を受けて死ぬことになるかも知れない時代でした。当時の少年達の憧れは少年飛行兵でした。私も海軍甲種飛行予科練習生に志願し、三重海軍航空隊奈良分遣隊に入隊しました。軍隊生活の厳しさはある程度覚悟していました。

二、通信術で鍛えられる

予科練の教科は、一般学科・軍事学科等盛沢山です。モールス通信の習得は飛行兵として不可欠です。最初から一分間六十字のスピードで受信することが要求されました。毎晩夕食後に講堂で指導を受けました。符号は・—の組み合わせで、イロハ四十八字の他に記号や数字など、一寸聞き洩らしたりすると五～六字飛んでしまいます。ミスがあればゲンコツやバッター（軍人精神注入棒）の制裁が待っています。二ヵ月で完全に受信せよという命令です。モールス通信が取得出来ると発光信号の学習がこれに続きます。夜、電球を点滅してモールス符号を受信します。「まばたき」すると符号が切れて別の符号になってしまいます。したがって、長時間眼を閉じない訓練をする必要があり、涙がボロボロ出てきました。

三、手旗信号

手旗信号は右手に赤、左手に白の旗を持って上下左右斜に手を振って信号を送ります。手の振り方が正しくないと、受信者が混乱します。基本となる手の振り方、角度が厳しく指導され、正しくないと手旗で容赦なく叩かれたものです。時には、手を振り上げた姿勢で三十分以上もそのまま待たされたことがありました。制裁だったのです。

四、連帯責任

軍隊生活は団結して任務に当たることです。一人のミスが任務の遂行に支障を及ぼすことがあります。一人でもミスがあると厳しい制裁が待っていました。就寝後に叩き起こされてアゴ（拳骨で頬を何回も殴る）やバッター（軍人精神注入棒で尻を何回も叩く）は毎晩のようにありました。と言ってミスをした者を怨むことはありません。教員から見ると、我々新兵の行動は歯がゆく見えたのかも知れません。それは私が後輩の指導練習生として、その任についた時に感じました。教員は第一戦で戦闘に参加してきた歴戦の勇士です。中にはガダルカナル島の激戦地を体験された方がおり、その苦戦の状況を教訓として細かに教えてくれました。後方からの補給が絶たれ、草は言うに及ばず鼠を捕えて食べたそうです。体

力はみるみるうちに消耗して、骨と皮ばかりになり、戦死した戦友の遺体を埋葬出来ず落葉を集めて掛けてやるのが精一杯だったということです。

五、予科練教育中止となる

　我々の教育が進むに従い各地に航空隊が開隊され、奈良から清水海軍航空隊に転属となりました。飛行兵長に進級し、操縦・偵察に分かれて専門課程に進む頃となった時、戦局の逼迫により資材・人員等の余裕がなくなり予科練教育は中止となりました。予科練習生も本土防衛のために陸戦隊編成となって、沿岸防備・飛行場警備等に当ることになりました。

六、震洋・桜花基地建設

　我々が最初の任務についたのは震洋基地の建設でした。震洋というのは木製のモーターボートの前部に爆薬を装備した特攻艇です。清水は駿河湾に面しているので特攻艇基地に最適の要件が整っていたのだと思います。施設部隊に協力して建設に従事しました。震洋基地建設の途中から、我々は、桜花基地建設を命ぜられ、後輩達と伊豆半島の熱海峠に派遣されました。桜花とは、ロケットで上昇して敵艦を攻撃するために開発された戦闘機です。熱海峠の山中に桜花を発進させるためのカタパルトを建設するため、山中の宿舎に居住して、後輩を指導し乍ら作業に従事しました。作業の途中で転属を命ぜられ横須賀軍港に着きました。

七、特殊潜航艇出撃

　横須賀軍港内に待機中、「鮫龍が出撃するぞ。」という声が聞こえてきたので、戦友と桟橋へ駆けつけると、今しも五隻の鮫龍が出撃するところでした。鮫龍とは小型の特殊潜航艇です。南方の戦場に向って出撃するところでした。乗員には予科練の先輩がいます。二度と戻って来られない先輩達を見送るのに言葉が出ませんでした。皆、無言で帽子を振って見送るだけです。涙が溢れて止まりませんでした。これ程悲惨な別れはないでしょう。我々も何時かはこの様な立場になるかも知れないと感じました。

八、海軍水陸両用戦車隊へ

　いよいよ我々も陸戦隊へ配属されることになりました。横須賀鎮守府第十六特別陸戦隊（十六特陸）です。私の所属した十六特陸第二中隊は千葉県富浦町に駐屯していました。この部隊は水陸両用戦車隊で、戦車の正式名称は特二式内火艇といい、海上に浮いている所は漁船のように見えました。この戦車は、海軍が上陸作戦用に開発したもので、百八十両以上生産されました。この戦車の訓練は瀬戸内海の情島（Q基地と呼ばれた。）で行われ、軍事機密のため水陸両用戦車という名称は使用しませんでした。この基地から南方へ出撃し多くの先輩は散華され、一人の生還者もありませんでした。我々はその留守部隊に配属されたのでした。我々も海軍に水陸両用戦車があるとは夢にも思っていませんでしたので、実物に接した時は驚きました。まして、この鉄の箱が海に浮かぶとは、当時の新聞にこの戦車の写真が掲載されたことはなかっ

たので国民は知りませんでした。この部隊の任務は敵が本土に上陸した場合、背後から攻撃して敵に打撃を与えることでした。すでにサイパン島、硫黄島が米軍の手に落ち、沖縄にも戦火が拡大して、本土防衛に時間の余裕はなく、一旦、出撃すれば生還しない特攻隊に来たのだと、ひしひしと感じました。

九、通信兼機関銃

　戦車での配置は指揮（車長）、操縦、通信兼機関銃、戦車砲です。私の担当は通信兼機関銃で、機関銃席の横に通信機が設置されているので、一人二役になります。当時の通信機器は真空管式で電力の消費量も多く、機器の大きさや電池は、今とは較べようもない程大きく重いものでした。通信は電鍵を叩いてモールス符号で交信します。我々は既にモールス通信は習得していたので、これが生かされる時がきたと胸がわくわくしてきました。後は通信機の操作に馴れるだけです。戦車は海岸の松林の中に分散し、隠蔽してあります。訓練の第一は周波数が指示され、全車がその周波数に一致することです。一号車と二号車が交信している間に他車はその電波を傍受して受信調整の時間を短縮するようにします。何回か訓練を重ねる中に交信の時間を短縮することが出来るようになりました。当時は現在のようなエアコンの設備がなく、松林の中とはいえ蒸し風呂のような暑さの車内です。訓練とはいえよく耐えられたものと思います。車外に出た時、海風の涼しかったこと、高原の涼しさとはこのようなものかと思いました。

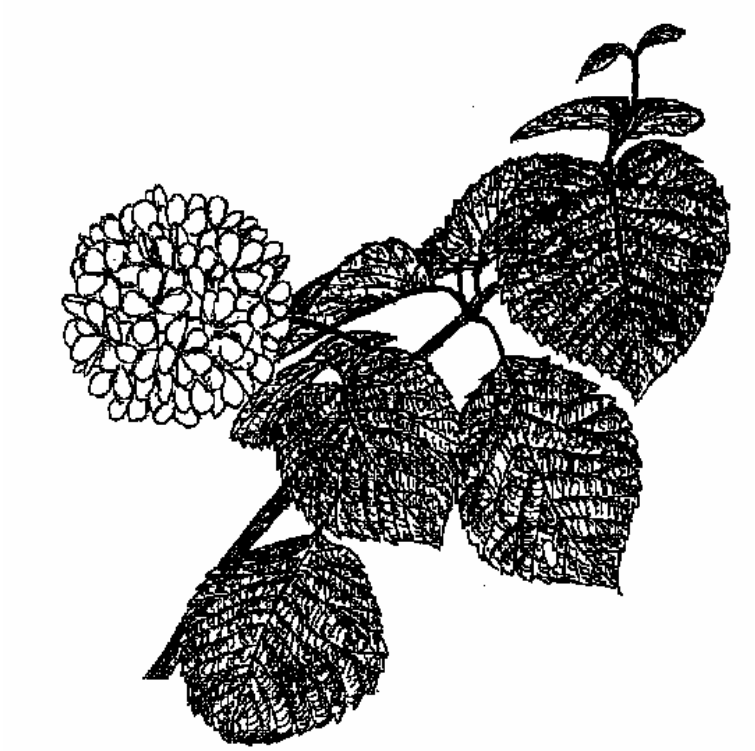
十、射撃訓練に入る

　通信機の訓練が終わったことで、いよいよ射撃訓練に入りました。射撃場は館山海軍砲術学校の射撃場です。機銃を撃った時の発射音は車外に出るので、車内では、引金を引いた時の「カチッ」という音だけでした。機銃は一発ずつ発射するように調整出来ます。最初の一発は夢中で撃ったので、車長からよく狙えと注意されました。落着いて照準器を覗くと標的がよく見えてきました。呼吸と引金を引くタイミングが大切であることを知りました。

十一、隊長に命を預ける

　昼夜を問わず猛訓練が続き、任務の遂行に明け暮れる日が続いた昭和二十年八月のある日、夜半に「至急中隊本部に集合せよ。」という命令がありました。暗闇の中、本部に集合。隊長より「大島南方に敵機動部隊があり本土に接近中、これから空襲や艦砲射撃があるかも知れない。貴様達の命は隊長が預かる。それぞれの故郷に向って、最期の別れの挨拶をしよう。」と言われました。覚悟していたとはいえ、これで十六才の生涯が終るのかと一瞬涙が滲んできました。入隊以来一度も帰省していない故郷の風景や家族の顔が脳裏を掠めていきました。特攻隊で出撃していった先輩達の心情がわかったような気がしました。それから戦車に戻って、燃料、弾薬を満載して、戦闘準備が急ピッチで進められました。夜が明けてきた頃、車内を見回すと、我々は、弾薬箱の隙間にいまし

た。砲塔の内側にはピカピカの真鍮が光る砲弾で、ぐるっと囲まれており、直撃弾を食らえばあの世行きという状況でした。しばらくして辺りの静けさに気がつく。どうなっているのかと思っていると、戦闘配置解除の連絡が入りました。大島の見張所が誤報を出したということでした。ここで緊張感が一気に崩れていきました。命拾いしたのだから有難いと思わなければなりません。これが実戦であったなら、いま生存している人の何人がと考えると、平和の有難さをしみじみ感じずにはいられません。復員して田無駅に着いた時、爆撃の跡生々しく、駅前には大穴が出来、ホームは飛ばされて木造のホームになっていました。



市民の戦争体験記（二）

2010 年（平成 22 年）3 月

編　集　　非核・平和をすすめる西東京市民の会
イラスト　　佐藤 まゆみ

発　行　　西東京市　生活環境部　生活文化課

〒202-8555　西東京市中町 1-5-1

TEL　　042-438-4040

e-mail　bunka@city.nishitokyo.lg.jp